

The Reminiscence of Exellia NG+1

動き出す災禍

作成レギュレーション

基本概要（新規／継続）

- ・ 経験点：92500／104000 点
- ・ 資金：132000／156000G
- ・ 名誉点：1500／1800 点
- ・ 成長回数：196 回
- ・ レベル制限：10～11
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク A 以上

各種制限

- ・ ヴァグランツ、蛮族 PC 禁止
- ・ SW2.0／2.5 標準流派入門禁止、標準流派の秘伝の習得・使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限（宿り木の棒杖、楔石強化を除き全面禁止）
- ・ シナリオ報酬の成長回数が 10 以上のとき、60%以上の偏重割り振りの禁止

動画用の参考資料

スターライト（聖珖神竜スターダスト・シフル）

読み上げ：未定

見た目はそのまま、聖珖神竜スターダスト・シフル。

メモ群

導入

しばらくぶりの休息

始原の十四席の手ほどき…そう記録に残った戦いから、3 週間近く…。君達は、その歩みの中では久しぶりの、長い休みを得ていた。動乱の中にあるとは思えないほどの、長い休みであったが故に、君達は困惑しただろう。

しかしそれには、エクセリアの目算があった。

「…『財団』も『律』も、最大限の実力を発揮できる状態の敵を、その上から蹂躪することで、己の目的を果たすだろう」という、エクセリアの仮説。

それを示したかのように…、君達は束の間の平穏を享受していた。

(※GMメモ：RP待機)

セリーヌ

「お母さんは…最近、寝てるからなあ…」

…セリーヌのその言葉は、君達に重くのしかかっていた。

石化した左腕に、白樺澄基地の竣工までの作業や、先の戦いで負荷。…状況に関しては、想像するまでもない。現にエクセリアは、白樺澄基地の最奥、聖王家以外の立ち入りを禁じたとされる領域である、『水球の間』で眠っていた。

文字通り、そこには人ひとりを浮かべて眠らせておけるだけの領域がある。不思議とその中では呼吸をすることができ、水球を満たす液は、その身に秘めた能力を強く反映する効能があるという。

…勿論、その水球の中で着衣することは、水球の液が持つ効能を弱くしてしまうため、許されない。つまるところ…彼女が受けてきた傷や呪詛、果ては左腕の石化も含め、すべてが見えてしまい、その凄惨さは、到底今人に見せるべきものではないからだ。

(※GMメモ：RP待機)

3週間という時間は、あまりにも短いかもしれない。だが…元より昇華の力を持っているエクセリアにとって、その時間こそが必要だった。

『眠り姫』

水球の中で、エクセリアは非常に長い夢を見ていた。

…水球の中で、肉体の力のみで石化を解くとなると、エクセリア自身の『意識』が夢を見るというのはおかしい話ではあった。というのも、エクセリアの身体を、本腰入れて治療しようとする場合…エクセリア自身の魂が、その工程にとっての足かせとなってしまうからだ。だから、エクセリアが、その魂で夢を見たとは、到底言えない。

…まがりなりにも人として生まれた、エクセリアの肉体が、その生物的本能から、レム睡眠にまで浮き上がったときに見せている、『幻想』に過ぎないのだ。

その夢が映したものはなんだったか。

少なくとも、治療が終わり、目を覚ました彼女にとっては、分からない話だった。

<hr>

そこでみたのは、かちえなかったみらいのたびじ。

おおくのなかまがわらっていた。おおくのたびじがよいものだった。

わたしはむすばれ、しそんをのこして、わたしはたびじをしるしつづけた。

だけどなぜだろう、なかまのめもとはみえず、そのこえはかすんでいて、ただそのけしきだけで、そのようにかんじていた。

もしかして、わたしはなんどもやぶれたの？おなじれきしを、あやまちを、なんどもくりかえしたと…？

ぜつぼうでしずむわたしのまえには、くろいやみだけがのこっていたようにみえた。

けれど…、ふと、つよいねがいをもったら、ひとつのひかりをみいだした。

そのひかりにてをのばしたら…、わたしはたおれていた。どこでもないばしょで。

夢幻の鎌使い

「ああ……俺はまた、負けたのか……。ハハ、ハハハハハハハハ……。ハア……。悔しいものだな」

だれ…？

夢幻の鎌使い

「俺は終ぞ……、周りが執着しているものの価値が、わからなかった……。

世の中はどれも、泥のような……、退屈で……醜く……くだらないものだ……」

いったい、わたしは…、かれに…なにをしたというの…？

夢幻の鎌使い

「だが……時折……こうして火が……愉しみがもたらされる……。まったく……憎いものよ……」

なんで…あなたは…ぼろぼろなの…？

おきあがろうと、すくおうと…からだをうごかそうとしても、うかなかった。

けれど、てんをあおぐわたしのめに…わたしが、うつっていた。

エクセリア

「…これは、辿り着けなかった幻想だ」

え…？

どういう、ことなの…？

エクセリア

「お前も『私』なら…、この作り物の幻想に気付くはずだ。導く者として、『魂』の私を呼び出し、映すほどに。お前は…、ここに辿り着きたい。けれど、事実として辿り着けていない。その理由ぐらい、その肉体が持つ脳で考えればいい」

なにを…いって…。

エクセリア

「さて…。そろそろ目覚めのときだ。いい加減、その幻想から出てきたらどうだ？

『私達』の戦いは、まだ霊災を超えた先にさえ、至っていないのだから」

りかいはできないまま、わたしはめをとじる。

…その直後、『肉体』のそばに、転送装置が落ちてきた。それは『肉体』の意志に関わらず起動し、『肉体』をあるべき場所に戻した。

<hr>

水球の近くにある、端末に表示されたタイマーが終了する。

封じ込められていた『魂』が目覚め、その肉体の状態を精査する。

左腕の石化が消えているのを見たエクセリアは、その意志で水球の『鍵』を開き、自らを閉じ込めていた液体を己から遠ざける。

エクセリア

「…3週間ぶり、か…。常人からしたら、とんでもない時間と言えそうだな…」

端末の近くに置かれていた衣に腕を通し、改めて己の力を理解する。

エクセリア

「やっこの腕で、セリーヌをなでられるな」

身体を大きく伸ばし、エクセリアは『水球の間』を後にした。

『財団』の決議

一方——

財団

『…やはり、このタイミングですか？K』

暗闇に包まれた部屋に、4枚のパネルが光る部屋。

そこで、財団はパネルの先の人物と話していた。

K

『この3週間、「最後の薪の王」が動いた形跡はない。それに…、知っているだろう？

3週間前から今日まで、魂が活動しているというシグナルが途絶えていたことぐらい』

財団

『確証がなかったのですね、君達の見解を聞きたかったんだ。あなたはと思う、D？』

D

『しかし…白樺澄基地ができてから、我々も攻めづらくなったように感じるが？M、君はどうだ？』

財団

『…「伝説の最適化」が成された君達が、恐れを抱くかい？

たとえ、高度 2000 フィート以上の敵を撃ち抜く砲台で固めたとしても…、直接照準を基礎として、それを自動で行わせる砲台を 56 基も並べただけ…。

「最後の薪の王」も含め、お世辞にもその練度は高くない。ならば、それ以外の砲台を作られる前に攻め込めばいい』

M

『…短絡的だな。4 年前を思い出してもらおうか。あのとき「N」を殺したのが誰だったのかを』

会議は堂々巡りに至る。それを切り上げたのは、リーダーといえる男…」だった。

J

『…もういい、M。これ以上の論議は意味を成さない。我々はその実力を以て、白樺澄基地を急襲する』

Jの宣言を聞いた財団は、満足そうな声で言った。「世界に示しに行く」と。

完全昇華（TRExLap2-17 Briefing）

…それからしばらくして、君達は大広間で休息を楽しんでいた。

（※GMメモ：RP待機）

そこへ、エクセリアが来る。

3週間ぶりに見たエクセリアは、少しだけ若く見えた。

（※GMメモ：RP待機）

エクセリア

「…何？私、なにかおかしいように見える？」

（※GMメモ：RP待機）

君達は「異常感知判定（スカウト）」「病気知識判定（セージ）」で判定してもよい。
判定に成功した場合でも、最終的な報酬に変化はない。

異常感知判定（スカウト観察） 目標値：21

成功時、エクセリアの髪の毛に露がついていることが分かる。つづけて見識判定（セージ知識）で露の正体について探ってもよい。

病気知識判定（セージ知識） 目標値：21

成功時、石化していたはずの左腕の一部に色が戻っており、触診してみると人の肌特有の弾力があった。相変わらず筋肉は固いため、それ以上は分からない。

見識判定（セージ知識） 目標値：21

成功時、それが『水ではない』ということだけは確実に分かる。

（※GMメモ：RP待機）

エクセリア

「私に関して気にしているところ悪いが…、そろそろ、仕事の時間だ」

そう言って、君達をサロンに誘導する。

エメリーヌ

「エクセリアは…病み上がりで悪いけど、イリヤからの情報よ。

『財団が動き出した』。建造済の砲台を含めて、ここを防衛する体制に入りつつ、敵主力の打倒を目指さなければならない。龍刻における国家安全保障に関わる事態と取ることができるけど、どうする？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…国民への避難指示。彼らへの被害を最小限にするんだ。今すぐ発令してくれ。

それと…、私はここに残る。病み上がりの身で無茶はできない。折角治療を済ませたのに、また患ってしまったのは元も子もないからな」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、エクセリアは『暗魂の暁』周辺の地図を机に置く。

ジェシカ

「…久々に地図が役に立ったな。まあ…測量班の全力に助けられた感じだな」

エクセリア

「倉庫番をさせていたアデライテを呼び出した甲斐があった。…さて、ここからは全力を尽くす。財団を倒し…そして、この戦いを終わらせるんだ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「では作戦を説明する。財団の指揮下と思われる部隊が、ここ白樺澄基地に向かって接近中との情報を得た。戦力の詳細は不明だそうだ。…明らかに騙そうとしているが、今私達にできるのは、この情報を元手に敵を倒すことだけだ」

エクセリアが指し示した一点。そこは、アゼルマレム地方の外縁とも言うべき場所。
龍刻において、確かに魔動機文明が栄えていたと示す場所だった。

エクセリア

「出現が予測された場所…アラマサ高地に向かうぞ。私達の答えを、叩きつけに」

VENDETTA ～死神部隊討伐戦～

君達は、アラマサ高地に辿り着いた。

エクセリア

『財団の連中…この3週間で、なにやら不自然なことをしているらしいね。』

冒険者を狙い撃ちで殺しているらしい。それも、君達みたいな腕利きばかりを…。それでも、各国が連携して、事態を終息させようとしている。諸国の問題が、少しずつ片付いていってるからな。残りは財団が持ち出した兵器と…、彼らのお抱えの兵士たち、そしてホクトクラフトに付き従う神城まどかだけだ』

その上空で、「スターライト」と名をつけられたスターダスト・シフルに乗っている君達が、通話の耳飾り越しでエクセリアの状況整理を聞く。

エクセリア

『まあ…、私達が片付けるしかないのだが』

降下した君達が、その場所をしばらく歩いていると、エクセリアからまたしても通信が入る。

エクセリア

『静かすぎる…。いくら遺構とは言え、なにかしらいてもおかしくはない…。』

情報によれば、間もなく財団の兵器が現れる一、なんて言っていたのだが…』

その直後、空間に大音量で声が響く。

K

『その予定はキャンセルだ、冒険者』

(※GMメモ：RP 待機)

遠方から、赤いフレームと黒い装甲の魔動機が現れる。
それが狙撃銃を構えると、高らかに宣言する。

(※GMメモ：BGM「9」)

K

『見せてもらおう、お前の持つ力』

敵：R.I.P.1/K

エクセリア

『…今のが…死神か？…財団の奴、ファンタズマ・ビーイングなんて狂った計画をやって
いやがったか…！』

(※GMメモ：RP 待機)

通信越しに毒づいているのが分かるエクセリアの声を他所に、事態はさらに進展する。

D

『K までもか。さすがは、クリスタルの加護を受けた光の戦士だ。
俺は手段を選ぶ気はない。これが使命だからな』

更に敵が飛来する。重装機 1 機、中装機 3 機。

敵：R.I.P.2/D、UNAC XXX×3

君達は、更に死神を討ち倒した。

エクセリア

『…まだ来る。魔動機 1 体、これまでの死神とは反応が違う…。
どうにも、逃がしてくれそうもないな。こっちからひとり撃ち出す。

なんとか持ちこたえてくれ』

M

『そうよ、エレーミアス。もう少し、付き合ってもらおうわ』

そうして現れた魔動機は…、これまでの赤いフレームではない、青いフレームのものだった。

(※GMメモ：RP待機)

M

『始めましょう。その身を破滅に奉じるために』

敵：R.I.P.3/M

R.I.P.3/MのHPを30%減らしたタイミングで、イベント進行

二柱の『 』

君達が、その魔動機に苦戦しているころ。

その魔動機は下がり、君達を睨む。

J

『少しは勘が取り戻せたか、M』

M

『私もまだベストではない、この場は——』

後退する、と言おうとしたタイミングで、天から火の召喚獣が降ってくる。

クライヴ

『ここまでだ！』

至近距離で火炎弾を撃ち込み、その魔動機の両腕を溶融させる。

J

『…まさか、冒険者が束になっていようとは。恐ろしいものだな』

クライヴ

『…そうは言うがな、その魔動機…爆散しているぞ?』

」

『構うまい。秩序を破壊する力、異分子。何もかもを焼き尽くす定め、そして、全てを捨てて尚、戦いをやめぬ執念…。そのどちらが本物なのか、私は知りたい』

そう言いながら、ヘリは撤退していく。その代わり…空をつんざくような、轟音が響き渡った。イフリートが上を見る。そこに…黒い魔動機がいた。

」

『そして、その本物を私が殺す。私は死神だから』

(※GMメモ：BGM「*To Sail Forbidden Seas*」→「*Mekanized Memories – in the end*」)

敵：N-WGIX/v

この戦闘では、明確な判定やダメージは一切発生しませんが、召喚獣イフリートが参加します。

君達は、その黒い魔動機を撃破した。

エクセリア

『…これで満足か。ブッ壊れているのは、お前達だ』

財団

『認めない。人の可能性など、僕は認めない。僕の人生を、全てを破壊した…あの整いすぎた世界を、忘れることなどない。既にいくつもの兵器が動き出している。その力の源は《律》だ。たとえ僕がいなくても、止まることはない』

『だがもし、君達が『例外』だと言うのなら…、ならば、生き延びるがいい。君達にはその権利と義務がある』

(※GMメモ：RP待機)

財団はそうのように、世界への憎悪を残して爆散した。

帰路に至りて

君達は、隠れ家へと帰る道を歩んでいた。

(※GMメモ：RP待機)

そこに、奴が再び現れる。

まどか

「見つけたぞ…、強欲な冒険者共。今ここで、貴様らを葬るとしよう」

クライヴ

「…貴様が…、神城…！？」

直後、君達はその空間から消え失せた。

クライヴ

「…こいつは、まずいな。急いで、エクセリアに伝えなければ」

クライヴの眼前に現れた、次元の裂け目…。

それを睨みつつ、彼は君達の無事を祈った。

報酬

経験点

4000 点

資金

15000G

名誉点

このシナリオに名誉点報酬はありません。

成長回数

8 回